

ドン・キホーテの夢―「文明国標準」の帝国日本の国際秩序観―

酒井一臣

(九州産業大学国際文化学部)

本報告では、近代日本の国際秩序観を、「文明国標準」の習得期(明治期)・新外交期(大正期)・地域統合論の台頭期(昭和戦前期)にわけ、それぞれの時期の日本の国際秩序観を紹介する。明治期の日本は、文明国の作法として古典外交を習得し、帝国主義の国際秩序のなかで外交をはじめた。条約改正を成功させ、欧米諸国と対等な関係を実現するために、「文明国標準」の達成は至上課題となった。古典外交(旧外交)の国際秩序のなかで、日本は、日清・日露戦争の勝利という成功体験をえた。その後、文明国の基準そのものが変化していくなか、日本は右往左往させられつつも、帝国主義の発想から抜け出せられなくなる。

第一次世界大戦後に現れた帝国主義に批判的な新外交秩序では、日本は既得権益の維持を前提とした国際協調外交を行った。新外交も大国の既得権益の護持を前提とした大国間協調であった。よって、日本も一定程度の国際的役割を果たした。しかし、帝国支配への抵抗が強まると、日本の既得権益の維持が困難になっていた。そのなかにあって、古典外交の国際秩序を根本から否定する発想が求められるようになった。

1930年代になると、主権国家の並列状態を国際秩序の基本と考える大前提を否定した地域統合論が唱えられるようになった。日本でも一部の知識人がこれに反応して東亜新秩序を訴えたが、結局「大東亜共栄圏」も帝国日本の拡大としかとらえられなかったのである。アジア主義など、「大東亜共栄圏」をめぐる現れた文飾に満ちた議論は、「文明国標準」の達成に努めても、基準じたいが変化して標準に追いつけない日本のいらだちを示したものであった。

報告では、「文明国標準」の発想が近代日本に与えた影響を考察しつつ、それぞれの時期の代表的国際秩序論を分析する。近代日本は、国際秩序観の変化に対応しきれず、帝国日本のアジア支配という夢を追い、破滅の道を歩むことになった。「文明国標準」に縛られた近代日本の姿は、失われた騎士道物語を夢みて放浪したドン・キホーテの如きものであったと主張したい。

生まれくる文明と対峙すること—7 世紀後半の地中海世界をめぐる—

小林 功

(立命館大学文学部)

古代末期、ローマ帝国の南東の境界、アラビア半島には、ローマ人が「アガレノイ」などと呼ぶ人びとが居住していた。だが 7 世紀になると彼ら「アガレノイ」は急速に勃興して、アラブ国家を生み出した。彼らは 642 年までにシリア・エジプトを支配下に収め、650 年代初頭までにササン朝ペルシアをも併合した。661 年に成立したウマイヤ朝はさらなる征服活動を進め、8 世紀前半にはイベリア半島から中央アジアに及ぶ大国家が形成されることになる。

アラブ国家の出現は、単に大国家、大帝國が成立・形成されたという以上の意味を持つ。『クルアーン』に代表されるイスラームの信仰体系や法慣習、そして生活習慣が形成・整備されていった。また 7 世紀末に導入されたディナール金貨・ディルハム銀貨のような新しい貨幣や新しい度量衡のシステムなどの整備なども進んだ。アラブ国家は(古代地中海世界やオリエント地域の文明の後継者という側面はもちろんあるものの)、独自のイスラーム文明を新たに創造したのである。

このような、新たな文明の出現という状況への対応を迫られたのが、それまで地中海世界を支配してきたローマ帝国であった。ローマはアラブの急速な勃興によって、シリア・エジプトなど多くの地域を喪失しつつも、8 世紀以降も存続し、その後も長期にわたって併存していくこととなった。そしてそれはローマにとって、自らの生き残りをかけた戦いだけでなく、(滅亡したササン朝ペルシアとは異なって)生まれつつある新たな文明との長期的な対峙をも、余儀なくされることを意味した。「アガレノイ」はもはや境界の蛮族ではなく、独自の文明を生み出しつつある巨大な隣人であり、「アガレノイ」に対する認識や評価も、彼らとの対峙や対話を通じて大きく変容していった。そして、「アガレノイ」との長期にわたる「対話」「対峙」を通じて、ローマ帝国も自らの姿を変え、「ビザンツ帝国」へと変容していくことになる。

本報告では、アラブ国家・イスラーム文明に対するローマ～ビザンツ国家の視線や認識の変化を分析し、それらを踏まえた上で、ローマ～ビザンツ国家が生まれつつある新たな文明にどのように対峙し、そして自らの姿を変化させていったのか、検討していく。

文明の誕生—古代アンデスの事例から—

渡部森哉

(南山大学人文学部)

約 20 万年前に誕生したとされるホモ・サピエンスは地球上に拡散した。その後、世界のいくつかの場所で「文明」と呼ばれる社会の大規模化、複雑化のプロセスが生じた。そして文明化のプロセスは拡大を続け、現在の地球上の人間の大部分を巻き込むこととなった。

本発表では、文明と認定される社会がどのように誕生したのかについて考察する。事例として取り上げるのは南米大陸の古代アンデス文明である。

アメリカ大陸に人類が移住してから、海面が上昇した。その結果ユーラシア大陸から切り離されたアメリカ大陸では、旧世界とは別個に、農耕、土器製作、金属器製作などが始まり、文明が誕生した。中米のメソアメリカ文明と南米のアンデス文明が知られており、後者の方が 1000 年以上古い。

古代アンデス文明の最後に登場したのはインカ帝国である。インカ帝国をアンデス文明の完成形とすれば、その特徴がいつまで遡るかを検討することによって、アンデス文明の起源はどこにあるかを議論することができる。現在のところ文明の最古の証拠は公共建造物であり、紀元前 3000 年よりも前に遡ること、最古の神殿は山地ではなく海岸地帯で出現したことが知られている。

アンデスの特徴は、「文明」の誕生が紀元前 3000 年を遡る一方で、最古の「国家」の形成は古くとも紀元前の 1 世紀頃と認定されているという年代差にある。旧世界の文明では、文明の登場と国家の形成がほぼ同じ時期に進行し、1 つの現象を別の側面に着目して説明しているとも言える。アンデスの場合、最古の神殿の誕生から初期国家の誕生までの時期を形成期という名称で区分し、その時代の社会は神殿を中心として統合されていたと説明される。この時代の社会が一体何なのかを見ることでアンデス文明の特徴、ひいては人類史における文明の意味について理解できる。これまでアンデス文明は旧世界との文明との比較で、文字が欠如している、などの点から例外的に扱われてきた。しかし、既存の枠組みに当てはまらない部分に着目し、それを組み込む形でモデルを再構成することで、より汎用性の高い議論に繋げることができる。

稲作と水田の文明—エコトーンと治水・灌漑技術の系譜から—

野間晴雄
(関西大学文学部)

文化は人間集団の構成員(民族, 地域, 社会)に共通の価値観を反映した, 物心両面にわたる活動の様式またはそれによって創りだされたものであるが, 精神的な性格が強い。一方, 文明は多様性を統合し大きなまとまりをつくりだす文化を包摂する上位概念で, 技術・社会の発達や制度など物質的所産の色合いが強く, 都市との親和性も高い。温帯・半乾燥地域の世界の四大文明は, いずれも麦作を食糧として発達した。しかし 1980 年代以降に脚光を浴びる長江文明は稲作が主体であり, 独自の人口増加メカニズムがあった。この文明は人口稠密な農村との親和性が高く, 都市が必ずしも前面には出ず分散的である。麦類に比べて米の人口支持力は 3 倍以上ある。これが湿潤アジアの人口増加と経済発展の原動力となってきた。

稲作の文明の生産基盤となるのが水田で, 両者は不即不離の関係にある。エコトーンと灌漑・治水システムはその「稲作と水田の文明」の表象キーワードである。エコトーンは移行帯・推移帯と訳され, 陸域と水域, 農地と森林域との境界地帯など 2 種類以上の生態系の境界で, 異なる環境が移行する場である。本来は湿性植物であるイネは畑作物(雑穀, 陸稲)からの進化ではなく, 確固とした水田造成技術(伐採, 整地, 畦作り, 床固め, 引水, 水田面の均平化)と農地の治水・灌漑というインフラとその制御, 肥料の増投で生産をあげてきた。そのために, 稲を栽培する土地の生態環境は決定的に重要である。

本報告では, エコトーンを改変し, 新たに適応する開発技術の発展の大きな流れと, 地域史が織りなす事歴を日本を中心に論じる。大陸・朝鮮から九州に招来したイネは, 「ラグーン・砂堆」と「盆地」という 2 つのエコトーンで異なる水田タイプを発達させる。前者が日本海沿岸にいち早く北上し, 後者は盆地で西日本の盆地でため池と小規模河川の灌漑と治水でクライマックスをむかえる。この 2 つの系譜には, 沿岸の海を介した移動や交流が大きな役割を果たす。その最終完成形は関東平野の開発と巨大都市江戸の成立である。

中国近現代における文明史観の受容とその展開

石川 禎浩

(京都大学人文科学研究所)

近代西洋由来の文明史観は、東アジアの「史」が「歴史学」に転換するさいの大きな触媒となったが、「文明」の語の多義性ゆえに、その影響は複雑な様相を呈した。西洋社会を先頭とする一元的発展を含意する「文明」の視点からは、人類社会の発展・前進を前提とする進歩史観が紡ぎ出され、他方で古代各地の高度な精神的、物質的営みの総体を「文明」とする視点からは、「黄河文明」や「四大文明」といった巨視的な歴史把握や自文化への自尊心が生まれるなど、それが後代に残した影響は極めて大きい。

むろん、今日の高みに立てば、文明史観の限界はあきらかであり、影響もプラスのものばかりではなかった。例えば、近年、「四大文明」という言い方は、世界では通用しないということが言われている。すなわち、人類最古の文明をエジプト、メソポタミアなど四つに括るといふ、教科書でお馴染みの呼称は、実は自国でしか通用しないものなのだということが、史学研究者から指摘されるようになってきているのである。ただし、興味深いのは、そのような声が日本の研究者からだけでなく、中国の研究者からもあがっていることである。例えて言えば、全く同じ狭い了見を持つ蛙がすぐ隣の井戸にいたのである。ならば、文明史観にまつわるこうした認識は、かつては共通の根を持っていたと考えざるを得まい。

中国における文明史観は、清末に日本を経由して流入して以来、同様に日本経由でもたらされた「地理環境決定論」や「人種史観」などの関連理論と様々に結びついて、複雑・多様なバリエーションを生み、時に強い政治的なメッセージを運ぶことさえあった。近年では、1989年の民主化運動の先触れとなったテレビ番組「河殤」(文明史観に立つ中国史解釈——内陸型の黄河文明の固陋性と海洋型の西洋文明との対比——)によって、共産党支配体制への批判を暗示し、大きな話題となった)がその典型例である。今なおこのように根強い力を持つ中国の文明史観は、どのようにして形成されたのか、その過程に影響を与えた日本の文明史観と中国のそれはどのように違うのか、さらには、中国の文明史観はなぜ今なお強いメッセージ性を持っているのか。本報告では、中国における文明史観の首唱者である梁啓超、文明史観によってロシア革命を理解し、それに共感した李大釗など何人かの文明史観を素材として、これらの問題に光を当てていく。